

『新春によせて』

一般財団法人函館国際水産・海洋都市推進機構 推進機構長 嵯峨 直恆



嵯峨推進機構長

新年明けましておめでとうございます。皆様におかれましては、佳き新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

私は昨年7月、当機構の初代機構長 伏谷 伸宏 博士のあとを受け、第2代機構長として着任しました 嵯峨 直恆 と申します。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

さて、当機構も平成30年の今春で組織の設立から10年目、そして海洋研究センターの開所から5年目という、節目の年を迎えることとなります。当機構では、次の4つの主要施策 ①水産・海洋に関する学術研究機関の集積 ②地域と学術研究機関の連携 ③観

光と学術研究の融合 ④水産・海洋と市民生活の調和を柱に掲げ、産学官連携による新産業の創出、雇用の創出を促し、ひいては産業・経済の活性化に繋げる「国際的な水産・海洋に関する学術・研究拠点都市」の形成を目指してきたところであります。

①に関連しては、現在、北海道の函館水産試験場をはじめ、北海道大学大学院水産科学研究所や北方生物圏フィールド科学センター、公立はこだて未来大学、函館工業高等専門学校等の6つの学術研究機関と、民間企業7社の合計で13の研究機関が入居しており、各々の入居研究機関では水産・海洋領域に関連した研究開発を行い、多くの成果を上げつつあります。

②に関連しては、地域の重要な水産資源である昆布の増養殖技術や、ガゴメ・アカモクなどの未利用海藻資源の高付加価値に向けた研究のほか、海洋観測技術の開発が行われています。特に、当機構内に設置された函館頭足類科学研究所では、イカ・タコ類を含む漁業対象種の資源変動の持続的利用に関する研究を行い、地域に貢献しているところです。

③④に関連しては、海洋研究センター開所以来、練習船「日本丸」や研究船「かいめい」等の我が国を代表する大型船の寄港、オーシャンウィークでの海に親しんでもらうためのいくつかのイベント、「イカマイスター」認定試験の実施、そして普段から多くの市民や観光客の方々に見学に訪れていただいております。特に毎年夏に行われている「マリンフェスティバル」には多くの方々に訪れていただいております。昨年は5,000名を大幅に越えるお客様においでいただき、今や、当機構の名物イベントになりつつあります。

それから、昨年はイカの不漁、昆布天然物の不作等、地域の水産・海洋産業にとって大変厳しい1年でありました。その一方で、新しい養殖産業、水産物の海外輸出、食や芸術をコアとした観光客の誘致等、食関連の新産業の隆盛による地域振興の展望も見えてきた年でもありました。当機構としては、本年も入居研究機関の方々とスクラムを組み、しっかりと地域の課題に向き合い、かつ、地域の産学官金・市民の皆様と連携して、水産・海洋を基軸とした地域の発展を切り拓いてゆく所存です。

結びにあたりまして、本年が皆様にとりまして、素晴らしい年となりますことをお祈り申し上げます。新年のご挨拶とさせていただきます。



『イカの街・函館の活性化を目指して-Ⅱ』

一般財団法人函館国際水産・海洋都市推進機構 函館頭足類科学研究所 所長 桜井 泰憲



桜井所長

明けましておめでとうございます。2018年、新たな年を迎えるにあたり、当推進機構に2016年4月に開所しました函館頭足類科学研究所所長の 桜井 泰憲 よりご挨拶申し上げます。

当研究所は、今年の4月で3年目を迎えます。当研究所の主な業務は、水産・海洋科学分野の調査・研究、特に頭足類（イカ・タコ類）を中心とする漁業対象種の生態・資源研究、および高鮮度付加価値化や有効利用に関する研究と啓発活動を進めております。更に、環境変化に応答するイカ・タコ類を含む漁業対象種の資源変動の解明と将来予測、資源の持続的利用に貢献し、新たな産業の創出にも寄与する所存です。

2016年に続いて昨年（2017年）も、1980年代以来のスルメイカの不漁が続きました。特に昨年は、10月以降に北海道太平洋側から津軽海峡、そして根室海峡とオホーツク海沿岸で漁獲されるスルメイカが極端に減ってしまいました。このまま行きますと、10月までに日本海と津軽海峡で昨年より少し漁獲の良かった“秋生まれのスルメイカ”と併せた我が国の漁獲量は、2016年よりも減る可能性があります。加えて、サンマ、ホッケとサケの漁獲量も大きく減少しましたが、サケとホッケは少し復活の兆候がみられます。一方では、寒冷期に増加するマイワシが道東での漁獲の中心となっており、日本海のニシンや陸奥湾で産卵するマダラも増えています。スルメイカも、今年の1月から3月の東シナ海の産卵場が復活することを願っています。



大型実験水槽で泳ぐスルメイカの群れ



研究所のシンボルマーク

函館を含めた北海道と東北の漁業は、我が国最大の多様な水産生物を水揚げしており、海からの蛋白資源と美味しい魚介類を国内外に提供しています。2010年以降、漁獲される魚種にも大きな変化が起きていますが、寒冷・温暖に応答する資源の増減は、かなりの精度で予測可能です。減少する水産資源には“資源増大に向けた産卵親魚の確保と幼稚魚の保護”、増える水産資源には“持続的な資源利用”が必要です。

このような変化をいち早く予測し、漁業から流通、加工にまで反映させる柔軟な水産業の在り方の提案、そして“水産物の量から質への転換”に向けた手法・技術展開に、微力ですがお手伝いしたいと思います。

“イカの街・函館”の活性化に向けて遠慮なくお声をかけて下さい。今年が水産関係者にとって笑顔でいられますようご祈念申し上げます。

桜井所長が平成29年度北海道科学技術賞受賞

この度、函館頭足類科学研究所 桜井 泰憲 所長が研究を進めてこられた、「イカ類の再生産過程の成否に応答した資源変動の解明と高鮮度流通に関する研究」の功績が認められ、「平成29年度北海道科学技術賞」を受賞されました。

イカやミズダコなどの頭足類の再生産機構を飼育実験により明らかにし、特にスルメイカの繁殖生態の全容解明と人工授精法の開発は、世界のスルメイカ類の繁殖生態と初期生活史に関する礎になっているとともに、寿命が1年のスルメイカなどの、地球温暖化を含む短・中長期の気候変化に応答する再生産過程の成否を通じた資源変動の解明に大きな貢献をされました。

1. 水産・海洋に関する学術研究機関の集積

『函館国際水産・海洋都市構想シンポジウム』 — 海洋研究センター成果発表会 — H29.3.8

「平成28年度函館国際水産・海洋都市構想シンポジウム」海洋研究センター成果発表会を開催いたしました。

本シンポジウムでは、日頃から海洋研究センターに入居する学術研究機関や民間企業が、新たな革新技術や新産業の創出に向けて取り組んでいる水産・海洋に関わる研究開発事業の研究内容やその成果について、一般市民を対象に報告を行いました。

入居研究機関を代表して、共和コンクリート工業(株)海藻技術研究所から「コンクリート会社が挑む豊かな藻場づくり」、(株)エコニクス・マリンラボから「光ファイバセンシング技術を活用した海洋環境モニタリングシステムの開発」、函館水産試験場から「コンブの識別について」と題して、それぞれの研究内容やその成果について報告があり、報告の合間には、他の入居研究機関によるポスターセッションも行われました。

本シンポジウムには、120名を超える参加者があり、「様々な研究機関が集積したセンターの良さが見えてきた」「今後も海藻の資源増大に向けた技術開発を進めてほしい」「報告の内容が有意義であり、水産・海洋都市として一段と充実してきた」などの意見があり、今後益々海洋研究センター全体が一丸となって地域に貢献するべく、その必要性を改めて感じた報告会となりました。



発表会の様子

『第1回海洋環境モニター報告会』 H29.12.21

国立研究開発法人海洋研究開発機構(JAMSTEC)と、当機構の共催により「第1回海洋環境モニター報告会」を開催いたしました。

本報告会は、青函圏域における学術研究機関との連携推進の一環として、JAMSTECむつ研究所が津軽海峡で行っている海洋環境変動観測等についての情報共有を目的として、渡邊 修一 むつ研究所長と気候変動適応技術開発プロジェクトチーム 石川 洋一 プロジェクト長のお二人を迎えし、「津軽海峡域における海洋環境モニタリングとその

利活用」と「沿岸域における海況予測システムの構築と水産業への応用」をテーマに報告をいただきました。また、函館頭足類科学研究所 桜井 泰憲 所長より、「津軽海峡周辺域における主な水産資源の動き」と題し、今後の気候変動による資源の動向について講演が行われました。

当日は、市民をはじめ現場で活躍されている水産・水産加工業関係者など90名を超える参加があり、身近な海の環境に対する関心の高さが窺える報告会となりました。



渡邊 修一 氏による報告の様子

平成29年度海洋研究センターにおける学会の開催状況

海洋研究センターでは、平成29年度に国際的な水産・海洋に関する2つの学会が開催され、アジアをはじめ世界各国から研究者が集まりました。

- ・ 第7回国際水産GISシンポジウム 平成29年8月21日～8月24日 参加者59名
- ・ 第10回東アジアにおける有害・有毒藻類ブルームに関するシンポジウム (EASTHAB) 平成29年12月13日～12月14日 参加者42名

2. 地域と学術研究機関の連携

『平成29年度イカ資源評価と予測に関する講演会』 H29.5.30



会場は超満員

当日は、道南地域の漁業者や水産加工業者などの水産業界関係者をはじめ、市民の方々など約250名を越える来場があり、参加者の平成29年度の漁模様についての関心は高く、講師の発言に熱心に耳を傾け、総合討論では活発な意見交換が行われました。

「平成29年度イカ資源評価と予測に関する講演会」では、平成28年度の国内のスルメイカの記録的な不漁と高値を背景に、供給量、需要量、期末在庫のいずれも過去最低の記録を更新したことから、近年のスルメイカの資源動向や平成29年度の見通し、さらには、新しい加工原料として期待の高まるトビイカについて、国立研究開発法人水産研究・教育機構より講師を招き、それぞれ講演をいただきました。



活発な議論が行われた総合討論

平成29年度受託研究・共同研究事業の概要について

平成28年4月に設置した函館頭足類科学研究所では、今年度4件の受託研究・共同研究事業に取り組んでいます。

「イカ類の高鮮度保持技術を活用した『地鮮地食』型生産・流通・消費システムの開発」では、主にイカの鮮度保持時間を延長する技術の普及を目指しており、また「青森県六ヶ所村泊漁協地区をモデル漁港としたイカ類の高鮮度流通の実用化に関する研究」では、「六ヶ所村泊の活イカ」ブランドの生産と販売に向けての検討を行っております。

さらに「スルメイカ対光行動実験結果の解析等に係る委託事業」では、漁獲過程を定量的に検討することによって漁灯操法の指針を構築する取組みとともに「プラズマ漁灯実証試験」では、実証試験を経てプラズマ漁灯の適正な艀装手法・操法のガイドライン策定を進めています。

これら各研究事業については、桜井所長と当機構の高原産学官連携コーディネーターが中心となって学術研究機関や地元企業などの関係機関との連携により取り組んでおります。

『戦略的基盤技術高度化支援事業（通称：サポイン事業）』 「沿岸域の漁場管理を漁業者自らが行うための魚場情報速報システムの構築」

平成27年度に経済産業省の採択を受けた本事業は、海洋研究センターの入居研究機関である北海道大学北方生物圏フィールド科学センターが中核研究機関となり、株式会社ソニックと静岡県水産技術研究所による共同研究事業として、当機構が事業管理機関を担い、研究開発を行ってきました。

本事業では、魚群探知機（普通魚探と計量魚探）から得られた情報を基に自動的に魚群マップを作成し、沿岸漁業を営む漁業者に、どの程度の大きさの魚が、どのくらいの量、どの辺りにいるのかなどを、リアルタイムにスマートフォンやタブレット端末に提供するシステムの構築を目指しております。

最終年度となる平成29年度は、魚群マップの運用テストを静岡県の用宗漁業協同組合において実施しております。

3. 観光と学術研究の融合

『第11回函館イカマイスター養成講習会・認定試験』 H29.11.3-5 / H29.11.19

「第11回函館イカマイスター養成講習会」を平成29年11月3日(金)、4日(土)、5日(日)に実施いたしました。

イカは、「市の魚」に指定されており、本事業では、イカについて生産・流通・加工・販売・料理法等について熟知する「函館イカマイスター」を養成し認定することにより、正しいイカの理解と消費を促進し、函館の水産業、流通・加工業、水産物小売業および観光業の活性化と地域の振興に貢献しようというものです。



3日間にわたる講習会



イカの様々な切り方も学びました

講習会では、函館の水産業や水産加工業などをはじめ、イカの種類やイカの生理・生態、資源管理、鮮度保持、流通加工についての講義のほか、実際にイカを解剖して体の仕組みを学んだり、調理実習も行いました。

11月19日(日)には、養成講習会を受講した38名が認定試験にチャレンジし、新たに30名のイカマイスターが誕生しました。

『イカ飼育水槽を設置』 H29.4～

海洋研究センターでは、日頃、来館者の方々から「泳いでいるイカをみたい!!」というリクエストにお答えして、2トンの常設円形水槽を設置し、一年を通してイカをご覧いただける様、スルメイカ、ヤリイカ、ジンドウイカ、ヒメイカ、アオリイカなどのイカ類を飼育展示しました。

5月のゴールデンウィークには、来館者の方々にヤリイカの産卵行動や卵塊を観察してもらうことが出来ました。また、9月には、津軽海峡で生きたまま採集されたアオリイカを飼育展示することにも初めて成功しました。

今後、この水槽を用いてイカ類の飼育実験を進め、近年のスルメイカの不漁の原因究明、特に水温変化が分布回遊や成長に与える影響予測を行っていきたくて考えております。将来、海洋研究センターの2トン水槽から、日本海の海の中を予測できる日も近いかもしれません。



ヤリイカの卵塊

『JAMSTEC海底広域研究船「かいめい」一般公開および特別講演』 H29.7.12



船内見学には長蛇の列

函館マリンフェスティバル2017のイベントと位置付け、国立研究開発法人海洋研究開発機構(JAMSTEC)が所有する、最新鋭の海底広域研究船「かいめい」の、函館港初の寄港を記念するイベントを函館西阜頭において実施いたしました。母港のある横須賀市以外では、全国初の一般公開となり、平日にも関わらず1,267名もの市民の方々が船内見学に訪れました。

また、海洋研究センターでは、JAMSTEC元研究員の川上 創 氏を講師に、「海の水はなぜ塩辛いのか?」と題した特別講演および海の科学実験(水圧実験)を行い、131名の小・中学生が来場しました。

4. 水産海洋と市民生活の調和

『函館マリンフェスティバル 2017』 H29.7.15-16



フィッシャーマンズワープの様子

「海の日」に併せ2日間にわたり、「函館マリンフェスティバル2017」を開催いたしました。

本イベントは、「函館国際水産・海洋都市構想」の実現に向け、産学官とさらには市民が力を結集して、各種施策を推進するとともに、市民一人ひとりが「海」を知り、「海」と親しみ、「海」とふれあう生活との関わりを深めることにより、構想への関心を高め、構想の推進に繋がることから、市民参加型イベントとして毎年開催しています。

1日目は、「表千家流学校茶道会」をはじめ、海のサポーターたちによるものづくり体験や海藻ファクトリー講演会、ワークショップのほか、マリンラーニング「魚拓づくり」等が行われ、多くの親子連れが思い思いの作品づくりを楽しみました。また、海の日記念イベントとして、「親子いか飯づくり教室」も併せて実施されました。

2日目は、海を学ぶ体験型教育プログラム「MARE(マーレ)」が行われ、函館在住の海のコーディネーターである 工藤 世一 氏と 塩見 浩二 氏の2人が講師となり、父母らが見守る中、約50名の小学生が参加して「海と光の関連性」や「水鳥の生活」について学びました。また、函館水産試験場の協力により、海水の密度差を利用して作る「海水フロート」体験のほか、函館水産高等学校の缶詰づくり・ロープワーク体験、海藻おしぼづくり等の各種プログラムも実施されました。

また、北海道大学北方生物圏フィールド科学センターの協力による、大型実験水槽での「魚類の音響反応特性実験」の公開をはじめ、「はこだてモノクラフトマーケット」や函館みなとパネル展のほか、道南の海産物や加工品等を販売した「フィッシャーマンズワープ」、ローイングマシン体験なども行われ、いずれも大盛況でした。

さらに、毎年人気の「タッチプール」では、ウニやヒトデなど海の生き物に直接触れることのできる浅いプールのまわりに、イベント終了まで生き物と遊ぶ多くのずぶ濡れになっている子ども達の姿が見受けられました。

2日間で約5,700人を越える市民等の来場がありました。特に2日目は、生憎の雨模様にも関わらず、本イベントを楽しみに来場いただいたお客様で賑わいを見せておりました。

今後も当機構では、「海」と市民生活との調和を主要施策として、広く市民が「海」に親しみ、「海」とふれあう生活との関わりへの関心を高めるイベントを企画・実施して参ります。



子ども達に大人気のタッチプール

『函館くじらフェスティバル』 H29.7.16

マリンフェスティバルの開催に併せ、ペリー来航のきっかけとなった歴史的にも函館市との関わりが深い「鯨」について、市民の方々にもっと関心を高め、鯨肉の食文化を見直す機会とするため、「函館くじらフェスティバル」を水産連合協議会と函館市、当機構による実行委員会の主催により、海洋研究センターで開催いたしました。

屋外では、鯨ラーメンをはじめ、函館水産高校の生徒が製造した鯨肉の缶詰等の他、各種鯨製品が販売され、屋内では、キッズコーナーやパネル展示、鯨料理教室等が実施されました。

当日は生憎の雨模様にも関わらず、市民など約2,000人も来場があり、鯨ラーメンや缶詰の販売には長蛇の列が出来るなど、「鯨」の食としての重要性と、食文化の継続について関心を高める有意義なイベントとなりました。

『ジオフェスティバル in HAKODATE』 H29.8.5

「ジオフェスティバル」は、北海道の将来を担う子供達の、地球科学や北海道の自然に対する興味・関心を高め、育成することを目的としたイベントとして、道内各地でこれまでに19回実施されております。

今年度は、函館で初めて海洋研究センターを会場に、開催されました。当日は258名の子供達や市民の方々が来場し、身近な環境問題や自然災害にも着目した実験や体験を通して、気軽に科学に触れ合うことができた有意義なイベントとなりました。



「ピンポンキャノン」体験コーナー

『函館オーシャンナイト』 H29.8.23

毎年、はこだて国際科学祭のプログラムの一つ「函館オーシャンナイト」を開催しておりますが、今年度は、ゲストに函館水産試験場 酒井 勇一 研究主査をお招きし、タッチプールなどでもお馴染みの、最近ではアワビに次ぐ高価な食材となっている「ナマコ・海鼠・海參」と題して講演いただきました。

当日は、約20名の方々にご参加いただき、今回のプログラムでは、コミュニケーション支援・会話の見える化アプリ「UDトーク」による音声認識技術を活用したリアルタイム字幕の提供も行いました。講演終了後には、4階展望台から函館湾を望む夜景をお楽しみいただきました。

『食べる・たいせつフェスティバル2017 in 函館』 H29.9.16



子ども達に好評のレジ打ち体験コーナー

「海」をメインテーマに、海と大地の恵みをコラボレーションしながら「食べる・作る・学ぶ」をコンセプトとした体験型プログラムをはじめ、試食や試飲、クイズコーナーなどのブースも充実したコープさっぽろ主催のイベントが、初めて海洋研究センターで開催されました。

当日は天候にも恵まれ、たくさんの家族連れを中心に3,400名の来場があり、本イベントをキッカケにセンターへ初めて足を運んでいただいた方も多く、センターのPRにも繋がる有意義なイベントとなりました。

『はこだてカルチャーナイト』 H29.9.22

函館市内の文化施設などを夜間に開放し、家族そろって地域の文化に触れるイベントとして「はこだてカルチャーナイト2017」が、はこだてカルチャーナイト実行委員会の主催により開催されました。

当機構としても趣旨に賛同し、海洋研究センターを会場に、エントランスホール・展望ロビーを夜間に開放したほか、海藻おしば教室を実施しました。

また、同センターの敷地内において、北海道開発局函館開発建設部や陸上自衛隊函館駐屯地第28普通科連隊による装甲車などの車両展示をはじめ、函館税関による麻薬探知犬デモンストレーション、北海道電力(株)によるお仕事体験やエネルギー体験広場のほか、北海道ガス(株)によるサイエンスショーも行われ、当日は、1,597名もの方が来場し、大盛況のうちに終了しました。



函館税関による「麻薬探知犬デモ」

5. 推進機構の運営に関すること

平成29年度理事会・評議員会の開催状況

平成29年度第1回理事会を平成29年5月16日に開催し、石尾 清広 代表理事を議長に、理事6名、監事2名の出席のもと、平成28年度事業報告ならびに決算報告について審議され、全ての議案について異議なく原案どおり承認されました。

また、平成29年度定時評議員会を平成29年6月19日に開催し、松本 榮一評議員長を議長に、評議員7名出席のもと、平成28年度事業報告に続いて、平成28年度決算報告、任期満了に伴う評議員・理事・監事の選任について審議され、全ての議案について異議なく原案どおり承認されました。

なお、評議員会終了後、臨時評議員会を招集し、評議員長に函館商工会議所 久保 俊幸 会頭を選定するとともに、第2回理事会を招集し、代表理事に函館水産連合協議会 石尾 清広 会長を再任し、新たに業務執行理事に 嵯峨 直恒 氏を選定しました。

選任された評議員・理事・監事については、次のとおりです。

評 議 員		理 事	
氏 名	役 職	氏 名	役 職
久保 俊幸	函館商工会議所会頭	石尾 清広	函館水産連合協議会会長
鎌田 光夫	函館市内漁業協同組合長連絡協議会会長	古伏脇 隆二	函館特産食品工業協同組合理事長
三浦 汀介	北海道立工業技術センター長	木村 暢夫	北海道大学大学院水産科学研究院副研究院長
安井 肇	北海道大学大学院水産科学研究院長	中村 正俊	函館市内漁業協同組合長連絡協議会事務局長
但野 茂	函館工業高等専門学校長	村瀬 充	函館商工会議所副会頭
片桐 恭弘	公立ほこだて未来大学学長	嵯峨 直恒	北海道大学名誉教授
境 勝則	函館商工会議所副会頭	種田 貴司	函館市企画部長
工藤 壽樹	函館市長		
顧 問		監 事	
氏 名	役 職	氏 名	役 職
松本 榮一	函館商工会議所名誉会頭	兵頭 法史	函館港湾振興会会長
伏谷 伸宏	東京大学名誉教授	西谷 裕幸	税理士
		吉村 健太郎	函館水産研修会幹事長

編集後記

早いもので、「函館市国際水産・海洋総合研究センター」は、平成26年6月に供用開始してから3年を経過し、4年目の冬を迎えました。

振り返りますと、平成15年3月に「函館国際水産・海洋都市構想」を策定以来、この構想を推進する母体として、平成21年4月に「函館国際水産・海洋都市推進機構」を設立し、さらに、構想推進の中核研究施設として、「海洋研究センター」を整備して、構想の実現に向けた取り組みを着実に進めてきました。

現在、「海洋研究センター」には北海道の函館水産試験場や北海道大学北方生物圏フィールド科学センターをはじめ、新たに設立された民間企業などが入居し、6つの学術研究機関と7つの民間企業の合計で13の機関が入居し、満室となっております。

特に、これら入居研究機関により、地域にとって重要な水産資源である昆布の増養殖技術や、ガゴメ、アカモクなどの未利用海藻資源の高付加価値に向けた研究のほか、海洋観測技術の開発が行われております。

また、毎年、入居研究機関による研究成果発表会や国際的な水産・海洋に関する学会も年に3回程度開催されており、さらに、市民が「海」について学び、親しんでいただく、マリノフェスティバルを毎年開催しており、今年はイベントとして海洋研究開発機構（JAMSTEC）の研究調査船「かいめい」の一般公開を行い、多くの市民が集いました。

この様に、「海洋研究センター」では、様々な取り組みを進めておりますが、全国各地から議員や研究者、企業など多くの方々が見学に訪れており、市で、これだけの規模の水産・海洋の研究施設を整備できたことに驚嘆の声と賞賛の言葉をいただいております。

推進機構では、構想の4つの主要施策を柱に掲げ、産学官連携による新産業と雇用の創出を促し、産業・経済の活性化に繋げる「国際的な水産・海洋に関する学術・研究拠点都市」の形成を目指してきたところです。！

平成30年は、「函館国際水産・海洋都市構想」を策定してから15年目の節目の年を迎えます。！！

「函館国際水産・海洋都市推進機構」は、この平成30年を、これから5年間の機構の新たなステージの始まりの年と捉え、更なる飛躍に向けて頑張ってお参りたいと考えております。！！！！